I am CODA!（コーダ）
愛を叫ぶカメちゃん

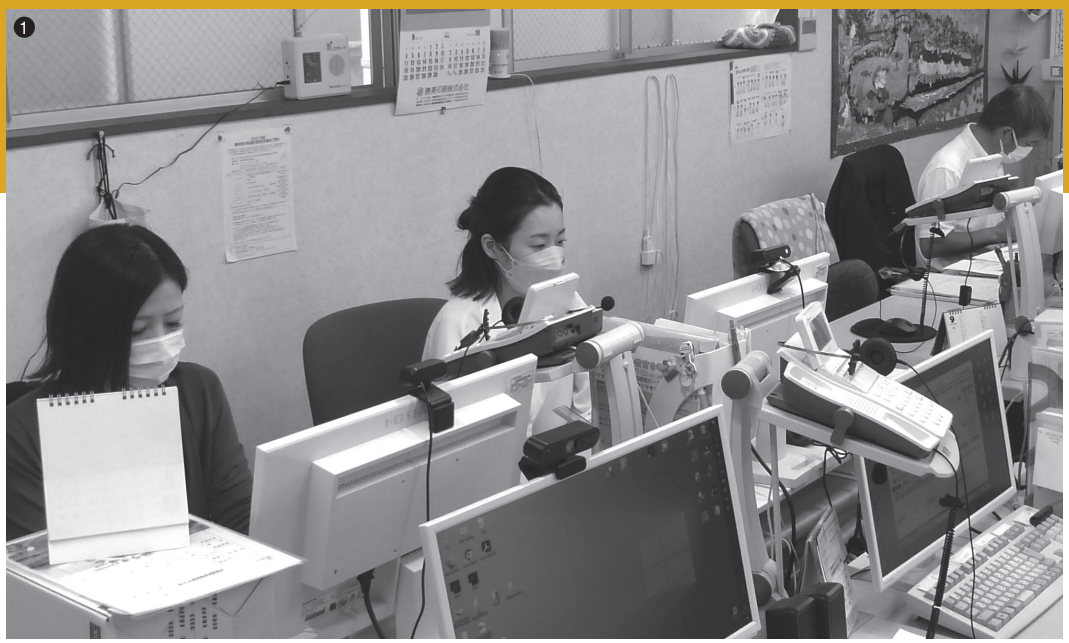
石亀 友香
北栄町

亀ちゃんこと石亀友香さんは、2歳の頃にはもう手話で会話をしていたという。手話で育てられ、物心つく頃には手話を使うようになっていたらしい。「今思うと不思議ですが、うちとよその家とが違うことは当たり前なことで、幼い時から受け入れていました。手話も、子どもが自然に日本語を覚えるように身に付けたのだと思います。中にはホームサインもありましたが、それは手話を学び始めてから気付きました」。そういう友香さんですが、手話を嫌いになった時がある。思春期を迎えた反抗期には、手話を見るのも嫌になった。「祖母から、『一人っ子のあなたが、お母さんを守るために福祉の道に進みなさい』と言われていたので、余計に嫌になっていました」。学校の懇談や通院時など、何かにつけて手話通訳者が同行するのも嫌だった。そんな友香さんを変えたのは、鳥取県ろうあ団体連合会（現・鳥取県聴覚障害者協会）の理事や地元地域のろうあ協会会長など、ろうあ運動一筋に精力的に活動していた父の存在だった。

※グラビアページでは、写真撮影の瞬間だけマスクを外していただきました。

▶写真❶
旧国鉄倉吉線廃線跡。地元の観光地として人気のある竹林。幼い頃過ごした家やお墓が近くにあり、友香さんにとっては心のふるさとで、自分の原点でもある。

▶写真❷
旧国鉄倉吉線「泰久寺駅」の看板。錆びた線路が竹林や緑の森の中へと続き、線路の間から伸びる竹が時間の経過を物語る。まるでファンタジーの世界のような景観が多くのファンを魅了している。



あんなに嫌だったはずの手話通訳の道へ

手話が嫌いだった友香さんが手話通訳を志すようになったきっかけは、なんとなく通い始めた手話奉仕員養成講習会での講義だった。「私が1歳の頃に両親が離婚し、親子として会うことはしばらくなかったのですが、思春期の頃から父とまた会うようになりました。19歳の頃に、手話の資格を取ってみようかと考えるようになり、父に講習会を紹介してもらいました」。通い始めた講習会の講義で、ろう者が受けてきた差別の歴史や『蛇の目寿司事件』などの話を知った友香さんは、ショックを受けると同時に手話通訳を目指す決意を固くした。その後、手話に携わる仕事に就きたいと父に相談したが、苦労が多い仕事だと大反対された。何とか説得を重ね、現在の鳥取県聴覚障害者協会に、念願叶って就職した。

▶写真❶
友香さんの職場である「鳥取県中部聴覚障がい者センター」にて。倉吉市役所近くの倉吉市葵町にある。一人ひとりが自分の仕事に集中して取り組む姿が印象的。

▶写真❷
明るく気さくな同僚の皆さん。この日は、コロナ禍のため出先機関への応援に駆り出された人もいて空席が目立ったが、同僚の皆さんが温かく迎えてくれた。

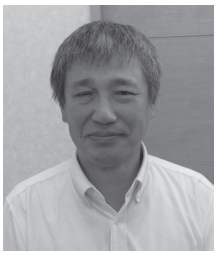
▶写真❸
2021（令和３）年に開催された「第55回全国ろうあ青年研究討論会in鳥取」の実行委員として活躍。写真左が友香さん。

入職した年に、全国初の「鳥取県手話言語条例」が制定

2013（平成25）年、友香さんが22歳で入職すると、同年10月には全国初の『鳥取県手話言語条例』が施行された。手話がメディアでも取り上げられるようになり、新人ながらも一気に環境が変わったのを感じた。「約10年、ただただ走り抜けてきた感じです。苦労が多いと言った父の言葉や、私がこの世界へ入ることを願った祖母の想いを噛みしめ、これからも精一杯邁進していきます」。友香さんは、全通研次世代活動委員会（N-Action）の委員としても、フル回転を始めている。

▶写真❹
埼玉県で開催された「2017(平成29)年全通研代議員会」に鳥取県の代議員として参加した友香さん。若輩者が場違いではないかと、終始そわそわしたと振り返る。

▶写真❺
2019（令和元）年までは「鳥取ろうバレーボールクラブ」でマネージャーをしていた友香さん。クラブは、全国ろうあ者体育大会や全国障害者スポーツ大会にも出場している。



鳥取県聴覚障がい者センター
統括センター長　戸羽 伸一氏

聞こえない人は、円滑なコミュニケーション無しには普通の生活はできません。だからこそ、手話通訳者の存在が重要なのですが、依頼件数が増大する一方で、手話通訳者不足が深刻です。養成講座の内容や講師のスキルアップに加え、若手の育成も直面している課題の一つです。石亀さんは、そんな状況下でとても貴重な存在となっています。彼女のことは小さい時から知っていますが、明るく聡明で、いつも積極的です。少し頑固なところはお父さん似かもしれませんが、一層の活躍に期待しています。

▶写真❶
戸羽センター長と友香さん。友香さんの母は、手話関係の行事などにまだ幼い友香さんをよく連れてきたという。その友香さんが手話通訳者になり、戸羽センター長は感無量だと目を細める。

仕事も遊びも楽しんだもの勝ち！続けることを大切にしたい

「私は、この手話通訳という活動・仕事をずっと続けていきたいと思っています。いろいろな苦労もいつかは笑えるのだから楽しめば良い、と考えるようにしています」。未経験の新しいことにも意欲的だ。昨年の「第55回全国ろうあ青年研究討論会in鳥取」では、若い世代が一緒に取り組むことの意義や手ごたえを感じたという。休日は、海や山の自然に触れたり、庭で好きなヒマワリや芋を育てたりしていると言う。リラックス法がユニークだ。目覚ましをかけず20時間くらい寝ると、心身ともにリセットされるという。若い世代の手話通訳者仲間を増やしたいという友香さんの新たなアクション期待したい。

写真／文　佐藤 篤

▶写真❷ 友香さんの父。ろうあ運動一筋に熱心に活動していたお父さんは鳥取県手話言語条例施行の約1年半後の2015（平成27）年に他界した。熱い“ザ・昭和の人”だったと友香さんは言う。

▶写真❸ 大好きなヒマワリ。ヒマワリの花言葉は「憧れ」「情熱」「あなただけを見つめる」など。今年は時期をずらして種を撒いてみたそうだ。

▶写真❹ 母と友香さんと祖母。3世代がそろったレア写真。友香さんは大のおばあちゃん子だったという。祖母も鳥取県手話言語条例施行1年後の2014（平成26）年に他界。